

價值單位の研究 (三)

岩 井 茂

四 價值單位の先貨幣的現象形態

a 設 問

この價值單位の先貨幣的現象形態といふ中には、貨幣、即ち一般に使用される交換手段といふ意味での貨幣——とは未だ關係を生じない時代に於ける諸種の單位が包含される。尤もマンガア⁽¹⁾は貨幣發生前に、評價をなすに用ひられた諸の財貨は之を「交換價值の標準測定」と稱するを得ないものと考へてゐるが、併しこの先貨幣的單位でも大體は價格表示手段となつてゐるのである。尤も先貨幣的單位が原則として價格を表示することはするが、それでも抽象的な諸單位が、實際交換をする際には現はれて來ないで、只代價をせんとする直前の算定をなすときに現はれる様な場合もある。斯くの如き場合と雖も、之と同様な經濟發展段階にあるその他の諸の單位と同様に之を先貨幣的單位といふを妨げなす。

(1) Menger : Grundzüge der Volkswirtschaftslehre, 2. Aufl., 1923, S. 292.

さてこの先貨幣的價值單位を立證することの困難に感ぜられるのは、今茲に引用しなければならぬ文献が大抵人種學的な見地から觀察を施してゐて、貨幣と價值の測定といふことゝを峻別してゐないのに基因してゐる。殊に貨幣の定義と貨幣のなす職能との識別の不充分なのが痛感せられる。例へばシュルツは貨幣を以て價值測定とし、交換手段とし、更に凡ゆる勞働所産の蓄積であるとなしてゐる。又シュミツトはフリリツボヅキツチに倣つて、「貨幣三職能説」をとり、貨幣とは支拂手段として役立つ價值測定なりとしてゐる。尙リツヂウエイでさへも貨幣と價值單位とを概念的に峻別してゐない。併し貨幣問題の此の方面が史學上に明確になつてゐないのは、先貨幣的單位の制度を窺ふ資料となる諸報告の粗雜なるに基因してゐる。

(2) Schultz, H.: Grundriss einer Entstehungsgeschichte des Geldes, 1898, S. 5.

(3) Schmidt, M.: Grundriss der ethnologischen Volkswirtschaftslehre, 1920, I, S. 157, 161; II, S. 75.

(4) Ridgeway: The origin of metallic currency and weight standards, 1892

b 原始的價值單位の先驅、原始的交換

發展の徑路を理論的に論ずるとき、殊に原始状態について之を論ずるときには段階的に説明するを便とする。ゾムバルトは段階説に伴ふ缺陷を指摘してゐるが、之は經驗的考察法をなすときには當籤まるのである。併しての段階的發展をなすといふ考へは合理的な事實として、又補助構成としては反つて理解を容易にするものである。

先づ第一に原始的交換の行はれた初期には未だ何等の價值單位も利用されなかつた。そして交換せられる財の範圍は狭少であり、否寧ろ交換それ自體が例外的な現象であつたのである。當時は價值單位の必要がなく、従つて嘗てミスが述べた様な、推則、即ち財は之に投ぜられた勞働量に比例して交換せられるものだといふ考や、又ホイトのいふ様な此の段階では「效用」が唯一の標準測定であるといふ考は維持されない。此の段階では交換された事物を第三の、客觀的な分母で表示しやうといふ望みはなかつた。シユルツは任意の贈與や掠奪をその特徴とする段階には一般的交換手段や價值測定といふものは知られてゐないといつてゐる。無言取引 (Silent trade) の如き非常に廣く普及せる制度にあつてさへも媒介者としての價值單位を用ひなかつたのである。

(5) Hoyt, E.: Primitive trade, 1926, p. 93.

(6) Schurtz: Grundriss, S. 71.

箇々の財の間に一定の交換比率が現はれるとそこに價值單位の萌芽がある、しかしこの交換方程式は極めて融通のきかない嚴密なもので、箇々の交換關係が全然獨立して並存して居り、箇々の財が相互に代替し得るなどは考へられてゐなかつた。ゴットルの言つてゐる様に、「馬⁽⁷⁾—馬⁽⁷⁾—馬⁽⁷⁾」といふ方程式から「馬⁽⁷⁾—馬⁽⁷⁾—馬⁽⁷⁾」といふ推論をなすのは購著を行ふものである、それは「すべての交換取引が嚴格な慣習の中に閉ぢ込められてゐる」からである。

(7) Gottl: Die wirtschaftliche Dimension, S. 54, 56.

又相集つてある交換比率を表はしてゐる澤山の要素があつても、このすべての要素に通ずる或る單位といふものはないのである。それは箇々の比率が或る基本單位を掛け合せて(Multiplication)出來上つてゐるのではなく只新らたなる要素を寄せ合はせて(Addition)出來たものだからである。ミヅウリー流域のインディアン仲間には次の様な比率が成立してゐる。

小刀2丁 = ズボン1着

小刀2挺 + ズボン1着 = 毛布1枚

小刀2挺 + ズボン1着 + 十毛布1枚 = 小銃1挺

小刀2挺 + ズボン1着 + 十毛布1枚 + 小銃1挺 = 馬1頭

小刀2挺 + ズボン1着 + 十毛布1枚 + 小銃1挺 + 馬1頭 = 革天幕1箇

小刀2挺 + ズボン1着 + 十毛布1枚 + 小銃1挺 + 馬1頭 + 革天幕1箇 = 女1人

茲に擧げたものは何れの一つも單位とは考へられない。ワアゲマンの言を以てすれば、この場合ある一つの事が價值單位となつてゐるのではなく、この交換方程式の中へ入つて來るすべての事物が皆價值單位となつてゐるのである。尚どの單位もその單位たるの任務を果たさないから、當然之を一般的交換手段、即ち貨幣といふことはできない。

(8) Wagemann, E.: Geldlehre S. 76.

(9)
 カツセルは計算の比率といふことゝ之とは多少別の觀念とを混同してゐる、それは彼にあつては比率といふときに既に單位が存立してゐるものと考へられてゐるからである。カツセルは「單純な數量關係によつて相互に結合してゐる澤山な單位より成る計算比率」といふものを念頭に置いて論じてゐるのである。そこで彼は己が論述を進めて行つて次の様な結論に到達した、即ちかくの如き計算比率の中すべての單位は當然抽象的計算單位とならなければならぬ、例へばある人が魚を以て計算をすれば、その計算といふものは明かに、平均的な質と量とを持つた魚によつてなされなければならぬと。この場合カツセルは、彼の追求せる理論的目的からいへば格別誤謬とはいへないがとに角、総合的交換比率と孤立的な價值單位とを明かに混同してゐる。要するに、上述の如き經驗の意味にていふ交換比率には既に明確な價值單位が備はつてゐるといふ結論は出て來ない。

(9) Cassel, G.: Theoretische Sozialökonomie, 1923, S. 378.

さてこの交換比率の領域内には價值單位の成立に肝要なる思想、即ち此の交換をして氣儘勝手なものたらしめない爲には、第三量の助に依り、交換物中の共通なるものを確めなければならぬといふ思想が未だ現はれて來ない。この思想は、諸種の財が互に交換せられる場合に於て、その交換されるものゝ分量が相等しいといふ根據でその交換が成立する場合に初めて生ずるものである。此の場合には價值の大小はその分量に依るといふ假定が無意識的に働いてゐる、そして正にこの理由で原始的な貨幣は屢々非常に高さ高なものである。原始人はよく價值の等しいといふことを分量の等しいといふことに解し勝ちなものである。ジムメルは次の様な例を掲げてゐる、即

(10)

ちニューブリテン島の土人は珠數つなぎにした寶貝をデワラと呼んで之を貨幣として使用してゐる。ところで土人が魚を買ふときにはその魚と等しい長さ丈のデワラを渡すといふのである。之を見ても價值測定の標準測度となるものは重さ計りではないことがわかる。

(10) Simmel, G.: Philosophie des Geldes, S. 118.

上述の如き場合にあつては、狹義の價值單位は未だ問題とならない、それは比較される二つの事物の第三の事物に對する關係が定まつてゐないからである。之を方法的見地から觀察すれば、量と「價值」とを同一視する場合には、それ等に通常の性質を持てる割合に應じて事物を交換するといふ考、即ち客觀的等價物といふ觀念が先づその根底に横はつてゐる。そこで或一定の量と質とを持つた一の財が凡ゆる交換方程式の中へ入つて來るとき初めて本來の價值測度を問題として論ずることが出来るのである。乍然シュミットの⁽¹¹⁾いつてゐる様に、この一般的に用ひられるといふことは價值單位(貨幣)についても同様(の概念構成要素ではない)。

(11) Schmidt, M.: Grundriss, II, S. 157.

c. 價值單位の由來に關する諸種の假設

世人が如何なる種類の事物に本源的價值單位たるの性質を認むべきかは、一義的に之を決めるとはできない。例へばシュルツは、流行的なものではなく従つて一般的に欲求される一部の裝身具を最初の價值單位と考へる。

そは装身具や其他一般的に愛好される事物は、一般的價格表示手段たるの性質を有してゐるからであるとする。

此の點に關してリツヂウエイは次の様に説いてゐる。曰く、「或社會に於て特殊の事物が一般に使用せられ又一般に通用するとき、この事物が凡べての價値を表示する單位となる。この物々交換の單位の性状は、その氣候や地理的位置やその住民の文化の程度によつて決定される」と。又ラフリンは贖罪金の單位を最初の價値測定なりとしてゐる。

(21) Ridgeway : metallic currency, p. 11.

(13) ラウムは價値單位の發生を儀式の慣例から説かうとする。併しラウムも亦その論述に於て貨幣と價値單位とを峻別してゐない、そして彼は例へば「貨幣は價値測定であり、従つて計算單位である」と説くのである。彼は斯くの如く兩者を同一視してはゐるが、併し彼が單位の固有の本質を認め且つ之を歴史的に研究してゐる功績は之を没することができない。即ち彼は價値單位の抽象的性質を認め、且つ價値測定は凡ゆる交換とは獨立に存立するといふことが理論的に考へられるとなす。(15) ラウムはこの價値單位を「牛」から誘導してゐる。併しこの「牛」といふ單位は商取引から發生したものではない、何故かといへばホーマアの時代には未だ一般的價値單位による商取引といふものは發生し得なかつたからである。併しその時代にもこの「牛」單位でいひ現はされる租税があつたのである。(16) 夫故「牛」單位は社會内部の取引 (intra-socialer Verkehr) にその起原を有するものでなければならぬ。(17) ラウムはこの起原を牛の有する神聖なる意味の中に認めた、即ち曰く「牛は最高の犠牲である、そしてこの特性あるに

より直接それが價值測定として用ひらるゝに至つた」と。且つこの「牛」といふ價值單位は他の價值標準とはその性質を異にしてゐる、即ち後者はそれが最少の單位であつて、之を集積して新たな量を構成するのであるが「牛」單位にあつては之を分割することに依り新單位が得られるのである。⁽¹⁸⁾ ラウムは更に進んで曰く、漸次發展の道程をたどつて、この「牛」といふ價值單位が益々抽象的な性質を持つて來るに従つて、いよ／＼財としての牛は他の事物によつて代位せらるゝ様になつた、即ち「本來は財であつたものが已れに代る財の價值測定となるものであるが、牛も五徳や鉢や女奴隸などの價值測定となつた」と。⁽¹⁹⁾ ラウムは之より論歩を進めて、一神聖なる單位を土臺として如何にしてそこから貨幣が發展して來たかを主として説いてゐるのである。

- (13) Laun, Bernhard : Heiliges Geld, 192, T. bingen.
- (14) Laun : a. a. O. S. 8.
- (15) Laun : a. a. O. S. 11, 14.
- (16) Laun : a. a. O. S. 17.
- (17) Laun : a. a. O. S. 50.
- (18) Laun : a. a. O. S. 59.

このラウムの想定が凡ゆる點に於て歴史的に立證し得られるや否やはこの際吾々にとつては重要なことではない。只肝要なことはラウムが先貨幣的價值單位の問題に對して大なる貢獻をなしたこと、價值單位の抽象性を重要視したことである。

抽象的單位が本來如何にして生成したかといふことについてはそれ／＼研究者により意見の相違があつても、多少段階的發展をなしたといふことは一般に認められてゐる。諸の經濟的現象や社會的現象殊に交換現象といふものが或程度に發達するには多少明確な形の價值單位がなければならぬ。この點についてはテイレニウスが有益な研究を發表してゐる。今その要旨を摘記してみよう。

(61) Thilenius : Primitives Geld, "Archiv für Anthropologie", 18. Bd. 1920, S. 8.

テイレニウスは財の交換に三様の形式があるとなしてゐるが、この分類は價值單位の問題を説明するのに便利である。第一の、所謂贈與取引の普通に行はれる段階にあつては、「評價とか評量を行はないで」財の交換をなすのである。第二の段階にあつては、二つの財の分量の大小が第三者例へば酋長の判定によつて決定されるといふ様な慣習が行はれる、この場合には交換方程式を客觀的に形作る萌芽が含まれてゐるのである。第三段階についてはテイレニウスは次の如く説いてゐる。曰く「最後には第三者の判定の代りに一產物そのものが交換される財の標準となり、従つて價值測度となる」と。この場合テイレニウスは價值測度と交換手段とを峻別してゐないけれども、その論法より察するにこの價值測度を既存のものとして考へてゐるやうである。とに角かくして先づ澤山の並立的な價值測度が形成された、そこでテイレニウスは一定の財相互の價值關係といふ現象を茲へ持て來たのである。或る一つの價值測度がその時代を通じて用ひられるものである、即ち「十五世紀時代のアイスランドに於ける棒鱈の様に社會の各成員がその財の獲得と利用とをなしてゐるとすれば、それが價值測度となるのである。

茲に述べた價值單位の由來はティレニウスの考方なのであつて、従つて之が價值單位の起原問題を解決する唯一のものではない。又ティレニウスもこの充分に普遍的なる事實的根據に基いてゐない結論が不確實なことはよく認めてゐる。ところで此の場合の様に非常に紛糾せる設問には二重の注意がいる。之を次の項に於て述べやう。

尙先貨幣的單位従つて價值單位そのものがどうして生成して來たかは、價值單位の先貨幣的現象形態を一々考へてみるによつてわかる。之を一々考察することはその單位の細胞學的研究なのであるから、この種のものには既に價值單位の(想定的)段階的發展を論ずるとき論ぜられてゐるのである。けれども之迄述べ來つた發展傾向に適合しないものや又は價值單位の抽象的性質を説明するに特に適切なりと思はれる様な箇々の例は尙擧げてないのである。

d 諸種の原始的價值單位

先づ第一にシュルツの所謂「純觀念的價值測定」(Die rein imaginären Wertmessen)⁽²⁰⁾に就て研究しやう。此の價值測定は物質の束縛を脱して、單位としての作用を「理想的」な純粹さを以て發揮するところに理論的な興味がある。此の種の價值測定は本來は具體的に存在するか又は素材的に考へられた財の分量なのである。併し此の素材的の基礎は漸次失はれて行つて、一定の交換價值の觀念と結びつける單純な名稱のみが残るに至る。普通最も多く取引される商品の一定量が單位として定められ、之に任意の名稱が附けられそしてあらゆる價值の標準尺度と

して用ひられる「シユルツ」。例へばアラビアのカメラン(Kamerun)ではクルウ(Kru)といふ單位が用ひられるが、之は一定量の椰子油を指す名稱である。又阿弗利加のアンゴラには片(Peca)といふ單位があり、又同様の意味で「長」(Long)といふ名稱が用ひられる。⁽²¹⁾又シエラ・レオネ(Sierra Leone)の「棒」(Barre)といふ名稱は一定量の鐵を表はす語である、リツチウエイに依ればこの「棒」は一八二五年に二志三片に相當してゐたといふのである。又文献的に見ると「マクウツ」(Makute)は現代に至る迄の抽象的原始的價值單位の模範的なものとなつてゐる。モンテスキュー以後貨幣論に於て他の凡ゆる觀念的單位を排除して、最早忘却することのできないものとなつてゐるこのマクウツは、その根本的經驗的事實の研究に當つて何等抽象的なものと考へられてゐないといふことがその特異の點である。即ちこの極めて多種多様の發展を経て來たマクウツが「原始的貨幣」の部類に入つて來るのである。

(20) Schurtz : Grundriss, S. 84.

(21) この點については左記の書参照

Degrandpre : Voyage a la Cote occidentale de l'Afrique (1786/87), Paris 1801, Bd. II, S. 46, 57/58.

かの有名な所謂「荷」(Paque)といふ綜合的單位はこの先貨幣的價值單位の部類に屬する。此の名稱は西阿弗利加の奴隸賣買から生じて來たものであつて、最初は奴隸一人の代價たる諸種の品物を寄せ集めて之を具體的な一荷となしたのである。ところがこの荷は漸次奴隸一人の代價たる事物の抽象的な總體概念となつたのである。そ

ここでドグンブレは「俘虜一人の代價を荷バケといふ」といつてゐる。

そこで人間そのものが原始的價値測度たるの役目を演ずるのである、又シュミットは人間に一般的價値測度たるの性能ありといつてゐる。人間を價値測度とか貨幣となし得るのは、人間そのものが社會的交換關係の對象となることに起因してゐる。尙人間があまり價値の變動を蒙らぬといふ主張は或意味に於て、殊に勞働價値説の立場から論證せられる。何時も奴隸一人の代價とその奴隸の勞働力との間にはある明確な關係が存立しなければならぬ、不變なる價格測度はないと正しくも否定せるガリアニ(Galiani)でも、凡ゆる測度の中その變動の最も少き價値測度は奴隸であると考へてゐる、即ち彼曰く、「人間は凡ゆる價値の測度である」(l'homme est la mesure de toutes les valeurs)と²²。ところがこの場合にも亦、價値測度の問題を論ずるときには何時も考察せらるべき一の事柄、即ちその測度そのものを他の尺度單位に歸屬せしめる試がなされてゐる。かの人間そのものに具體化する「價値」を表示し、又「物理的資本」の計算をなさんとする問題についてのすべての提案は皆上記の試をなし得るのである。そこで人間をば之に費やされた費用の大小によつて評價せんとするシェフレ(Schaffle, 1883)やエンゲルス(Engels, 1882)はその代表的なものといつてもよからう。けれども勿論かくの如き考へ方は「先貨幣的價値單位」の觀念領域を粉碎してしまふものである。

次にケルシヤグル(22)は高度に發達せる先貨幣的價値單位を取扱つてゐる。彼は貨幣と單なる交換手段とを區別し交換手段經濟の時代に既に相殺所(Kompensationszentren)の存在してゐることを假定しなければならぬと信じて

る。そして彼は此の主張を根據として貨幣經濟から計算經濟へ發展して行くものだといふ考を否定してゐるのである。併し若しこのケルシヤグルの主張する上述の如き見解が信實なるものなりとせんには、かの一般に承認されてゐる處の、交換手段の成立する以前に抽象的交換價値の意識が存するものとする重要な證據が必要となつてくるのである。此の點はキトソン⁽²³⁾が、同様な仕方でも抽象的な計算單位の存在を證明してゐる文章によつても裏書きされるのである。即ち彼はインデアン種族について次の如く云つてゐる「此の通貨は木の枝の小片を以て成立つてゐるが、その枝にはその種族の人々に貸した動産の貸付額を表はす爲めに小刀で特殊の仕方で刻みがつけてある。各負債者は自分自身の棒切を切つて之に刻みをつけ之を貸主に渡したが、この刻み一つが一の觀念的な價値單位を現はしてゐるのである。之等の棒切が一種の借用證書であつて、之が色々の種族の人々の間に流通し、最後に借主が、相手方の要求に應じて獲物とか魚とか獣皮とか羽毛などを以つて之を買戻したのである……」⁽²⁴⁾

(22) Kerschagl, R.: Theorie des Geldes und der Geldwirtschaft, 1923, S. 93, 95.

(23) Kitson, A. A. Fraudulant standard, 1917, S. 107.

キトソンは通貨、即ち流通手段について論じてゐるけれども、彼は明かに一の抽象的價値單位のことを論ずるのを眼目としてゐる。けれどもこの單位の性質がもつと明かになつてゐないのは缺點である、そこで素材の束縛から脱した單位が使用されるといふ根本的事實が残存する。

原始的價值單位の多くのものは之を尙先貨幣的のものと見るべきや又は既に貨幣的のものとして観すべきやを決めるのに困難である。そこで或事物を一般的交換手段と見る可きや否やを決することは愈々明白にしなければならぬだらう。尙原則として皮、鹽、諸種の材料、穀物或はその他の産物を價值單位とする場合にその決定をなすことが必要である。斯くの如き場合に於て、之等を抽象的價值單位となすことは最早方法論上不可能である。その他の事物、殊に象牙とか奴隷とかといふ高價な財について、之に「一般的交換手段」といふ名稱を用ふることができ従つて之が價值單位の先貨幣的現象形態の中へ入れられるかどうかは疑問である。此の場合その限界はあまり明確ではない。

五 補論、貨幣と價值單位の現象形態

a 價值單位に對する名目主義の態度

本節に於ては「價值單位」の概念内容を根本的に把束しやうと思ふ。それには最初から研究範圍を廣くするのがよい、さうすれば諸種の現象形態の異同を知ることができるからである。そこで先づ「貨幣」とこの貨幣の營む作用より論述を始めることになるが、若し抽象的價值單位と之本質上異つてゐる貨幣とを一緒にしてしまへば、抽象的價值單位の現象を全般に互つて認識することはあまりできない様になる。又設問の仕方がちがへば、假令

同一物を對象にとつてもその論述は當然異つて來るものである。とに角茲には之迄「價值單位」について述べた處とは多少異つた新しい事柄を述べようと思う。近代の理論家の中でクナップとエルスタアとがこの「價值單位」といふ概念に關する問題について最詳細に論究してゐる、そして此の兩人は余が茲に考へた處と同様の結論に達してはゐるが、それは全然同一のものとはいへない、何故かといへばそれはとりわけ彼等は「價值單位」といふ複雑な問題の中の一部分のみを論じてゐるに過ぎないからである。そこでこの普ねく喧傳されてゐるこの概念の組織的研究の正否を糾す爲には一應その主張を簡単に述べてみなければならぬ。

ワアゲマンが名付けて以て理論家なりとするこのクナップこそは、抽象的價值單位の概念を初めて解明した人である。尤も彼の著書「貨幣國定説」が出づる以前に於て既に價值單位の問題について散ら／＼な考のあつたことは之を立證することができるが、それはさて置いても、尙彼の主張は事實上にも制限を受けるのである。何となればクナップは貨幣を理解するのに必要な限度の價值單位を考察したに過ぎないからである。即ち彼は貨幣概念そのものを極めて狭く解し、表券的支拂手段のみが貨幣であるとなしたから、價值單位固有の性質で貨幣概念の内へ入つて來ない部分が逸せられてしまつてゐるのである。クナップにとつては、國家が支拂手段を造出せんとするの意思を以て價值單位を制定する場合にのみ、この價值單位が問題となるのである。此の點、即ち通貨よりも價值單位の優位性を認める點に於ては、茲に述べた余の意見はクナップの思想と一致する。だがクナップは價值單位そのものゝ成立をば研究對象とはせず、ある單位の存在してゐることを既存の事實として承認してゐる。彼は

只既存の價值單位に對して國家なり法制なりが如何なる態度をとるかを論證してゐるのである。成程クナップは貨幣を法制の所産だといふが、彼にあつては價值單位と貨幣とは同一物とは考へられないから、價值單位も亦法制の所産だと主張することはできぬ。夫故「貨幣國定説」の中に述べられてゐる思想は、實は「價值單位の貨幣的現象形態の」一面にすぎないものを説明せんとしてゐるのである。

(24) Knapp, G. F. : Staatliche Theorie des Geldes, 3. Aufl, 1921.

次にエルスタアはクナップの影響を非常に受けてゐるが、併し彼の著書「貨幣の魂」⁽²⁵⁾にはこの價值單位に關する部分についてクナップの考とは餘程距つたものがある。彼も亦「價值單位」といふ觀念の範圍を、余の述べてゐるより狭く限定してゐる、又クナップに倣つて貨幣の分類をなしてゐるが併しエルスタアは價值單位をも貨幣概念の中へ入れてゐるのである。先づ支拂手段から議論をすゝめてゐるが之には有體貨幣と帳簿貨幣とが區別せられる。そしてこの支拂手段は價值單位によつていひ表はされるとエルスタアは説く。そこで明かにこの場合認識對象となつてゐるのは支拂の大いさを表示する處の單位である。だから之について論究するエルスタアは價值單位の貨幣的現象形態を説いてゐるのである。即ち「この價值單位は貨幣經濟上の且つ貨幣經濟のみに存する現象である」。エルスタアはかく論題を限局することによつて、價值單位の問題を根本的に探究し得る可能性を奪つてしまつた。とりわけ彼は價值單位の創成については考慮を拂つてゐない。例へば凡ゆる價值單位の先貨幣的現象形態については、支拂あつて初めてこの單位があるといふ命題により定義的にこの問題を考察の埒外に置いてゐる

のである。かくの如く貨幣論の範圍内に在る價值單位を論ずることに限つて仕舞へば、その結論を複雑な一體たる「價值單位」に對して一般的に妥當するものと見ることができなくなつてしまふのである。

(26) Elster, K.: Die Seele des Geldes, 2. Aufl. 1923, S. 70ff., 187ff.

b 史的 概 観

さて余が本稿に述べた價值單位の性質に關する思想はクナップやエルスタアの思想とは反對に、もつと廣義なものである。併し彼等は他の論者例へばベンディクセンなどとはちがつて共に價值單位について學問的貢獻をなしてゐることは認めねばならぬ。とに角彼等は皆、その研究對象を限局する際に、「價值單位の現象形態」といふ問題と何等關係のない方法を構じてゐる。又往古に遡つてこの複雑な價值單位の問題について色々な説明がなされてゐるべきかを究めようとしても、矢張り結果であることを覺る。幾千年もの前に既にこの抽象的單位に關する有益な思想が發表せられてゐるが、それ等は未だ尙問題の核心にふれてゐない。そこでその主張が無條件に正しいとは云へないが、併しこの價值單位に關する思想は名目的貨幣觀にその根基を置いてゐることは間違ふなからう。そして價值單位の理論的研究をなす場合には、貨幣と價值單位とが並列的に擧げられるであらう。金屬主義的なマアカンテイリズムの時代にあつた無数の貨幣代用的單位は抽象的單位の最も良い例であるが、當時の如く素材的な考へ方をしてゐた時代には、實際上使用せられてゐた諸の單位の本性如何などといふことは一向

論ぜられなかつた。

既にデヴァナント (F. Avenant, 1898) が貨幣と計算錢 (Comptes) とを比較したときこの單位の抽象的性質に氣付いてゐるやうであるが、併し十八世紀の中葉に至つて初めてこの「價值單位」といふ題目が一義的に論ぜられるやうになつた。之れこそ貨幣論上に於ける初期の名目主義の時代であり、この時代に演繹的研究により「實價」貨幣 (Volwertiges Geld) から始めて、「低價」貨幣 (Unterwertiges Geld) に至り終ひに觀念的な貨幣に迄到達したのである。此の推論を初めてなしたのはモンテスキューである。即ち彼は不斷の改鑄により終ひには抽象的なものとなり得るところの「觀念的記號」(signe idéal) の發生すべきことを推論した。そして彼は斯くの如きものゝ例としてマクウツを擧げてゐる。併しモンテスキューは貨幣の内へ具體的に現はれてゐるところの抽象的單位を假定して、此の假定から推論を行ふといふ様な仕方をとつて意見を發表してゐるのではない。かういふわけで彼も矢張貨幣と價值單位とをきつぱり分けてゐない。それでも「純觀念的記號」といふ概念を貨幣論の中へ導入したのは重大な意義がある。

(26)
十數年の後テュルゴオはその著書に於て抽象的價值單位に關する該博な思想を發表してゐる、即ち彼は「羊」といふ價值單位を例にとつて、素材的束縛を脱した單位の本質を闡明にしてゐるのである。かく價值單位の特性を洞察することは勿論、具體的貨幣に一般的測度として役立つの能力と任務のあることを認めるのを防げるものではない。

(26) Turgot. : Reflection sur la formation et distribution des richesses. 1769. (但一七六六年に脱稿)

貨幣と價值單位とを初めて明瞭に區別したのはジェームス・スチュアート(J. Stewart, 1767)である。彼は單なる計算貨幣と流通せる貨幣との間に非常な差異のあることを認めた。即ち彼は計算貨幣といふとき明かに觀念的な貨幣を考へ、且つその本性を説明する爲に之と抽象的な長さの尺度や時間の尺度と比較してゐる。併し殘念なことには此の抽象的計算單位と具體的貨幣との正しい區別も、彼が他の箇所で計算貨幣といふ名稱を銀行貨幣(Banco Gold)といふ價值單位とは本質的に異なる事物に適用した爲、その價值を失つてしまつた。スチュアートはモンテスキューの説いたマクウツを引例としてゐるのでもわかるやうに、彼はモンテスキューの「觀念的貨幣」の問題に影響されてゐるのである。だからスチュアート以後に於てマクウツを引例として價值單位の問題に對して貢獻をなしてゐる著者は皆、モンテスキューか(より屢々)スチュアートをば引合に出してゐるのである。

アダム・スミスは、その勞働價值測度に關する有益なる所説を除いては、抽象的價值單位について根本的の解明を與へやうとはしてゐない。之れに反してトマス・スミスは⁽²⁷⁾ロシアによれば——眞の貨幣は觀念的貨幣のみである、そして鑄貨はその代用物に過ぎないといふ極めて現代的な主張をなしてゐる。此の種の議論は價值測度の職能につき稍深い反省をなしてはゐるけれども、相互に何等の脈絡がないし、そのみならず多くは簡單な論述たるの域を脱してゐない、スチュアートやアダム・スミスの次の時代の著者達は大體不變なる標準測度の問題や交換價值測定の問題に言及してゐるが之等箇々の問題に共通なる原理的方面には及んでゐない。又歴史主義や限界效

用學派の興るに及んで「交換價値の測定」を論じたり批判したりするとは等閑に附せられた、そして之によつて「價値單位」といふ題目につき根本的研究をなし得る土臺が失はれてしまつた。併し限界效用學派が「貨幣の價値測度たる職能」に對して述べた反對思想はその的を逸してゐる、何故かといへば彼等は客觀的交換價値や價格を論究してゐないで使用價値を論じてゐるからである。次にかの複本位論の争が起つて最良の價値單位選擇の問題が一時喧ましくなつた、併し「價値單位」といふ概念の問題には何等洞察が進められてゐない。この價値單位を價値單位として見た現象を初めてその研究對象としたのはクナップである、そしてその「貨幣國定説」がこの概念の内容を如何なる意味に解してゐるかは上に述べた通りである。そしてこのチュルゴオとクナップとの間の時代には「價値單位の抽象的性質」といふ題目に對してなされた貢獻は極く僅しかなく然かも詳細に論じたものはない。ところでクナップが價値單位の貨幣的現象形態に關して大なる貢獻をなし、以てチュルゴオ以來の不滿を充たしたのである、それ故にこそ彼は、ワアゲマンのいふ様に、抽象的價値單位の概念を初めて發展させた貨幣理論家として或程度迄是認されるのである。

(27) Smith, Th.: Essay on the theory of money and exchange, 1807.

クナップやその他茲に擧げた著者達は名目主義論者であるといはれる。そしてこの價値單位の問題について已が意見を吐露してゐるすべての理論家達は、彼等の考を貨幣論的名目主義の思想の中から取つて來てゐる、だから彼等が「價値單位」の概念を論じてゐるときには、その議論は貨幣現象の研究範圍に入つてゐるのである。彼等

が、價值單位が一定の職能を果たす爲にはその素材性はあまり重要ではないと認めてゐるのは至當である。成程名目主義的な思想は、貨幣に現はれた價值單位を論證するには誠に適當してはゐるが、この名目主義から出發して價值單位のあらゆる現象形態を説明し盡すことはできない。尙此の際忘れてはならぬことは、名目主義の認識せんとする對象物は抽象的單位ではなくして、貨幣價值であることである、従つて名目主義では貨幣單位の説明に必要とする限度に於て價值單位の説明をなしてゐるのである。だからこの具體的な貨幣に着眼してゐる名目主義にとつては價值單位が抽象的なものであることなどは一向重要なことではない、即ち事實が斯くの如くであるから、名目主義の貨幣論が價值單位を理解するに必要な合鍵ではないことがわかる。この理由からして、本稿に於て名目主義の考に何等の批評をも加へなかつたのである。

尙名目主義の中心點をなす思想は、貨幣がその任務を遂行する爲には何等「固有の價值」を持つ必要がないといふことである。此の論題を證明すること、之れが名目主義特有の問題である、そして之れが爲には限界效用説の助を籍りやうと、數量説の助けを籍りやうと又はその他どんな方法を用ひても厭はぬのである。名目主義の目から見れば貨幣はその固貨價值を持つ必要がない、只單なる指圖書とか表號とか、記號が何故に購買能力ある需要となつて現はれるかを證明せんとするのである。だから此の素材價值なき貨幣記號が一定の價值單位にて表示されるといふことや、又表示されねばならぬといふことについて名目主義は反對するものではない。そして此の主義は之等の單位が何等かの方法で素材的に定義されねばならぬといふことを別に否定しない、そは之を否定すれ

ば矛盾に陥るからである、然かも此の素材的基礎を循環論法を以て證明しても一向意としない。抽象的ではあるが併し素材的に考へられた單位と具體的ではあるが素材價值なき貨幣とは全然歸一して、概念上の困難は此の場合起らぬ。寧ろ肝要な點は次の事の中にある、即ち名目的貨幣觀にとつては抽象的價值單位に關する問題は何等答へらるゝ要を見ないで、それとは根本的にちがつた問題、即ち抽象的單位によつて表示される素材價值なき貨幣がその職能を果たし得る能力を如何に説明するかの問題が生ずるのである。此の問題は價值單位の本質を究明することによつて説明される。従つて名目主義的な設問にはこの單位を認めることがその論理的前提となつてゐる、だから價值單位は目的に到達する手段ではあるが併し最後の認識目的ではない。だが之れに反して價值單位の性質を説明するには名目主義を必要としない、しかのみならずこの單位が貨幣の論理的及歴史的の前提をなす。されば名目主義の立場を是認せんとするの企てをなし、その目的を達成せんとする限りは、價值單位といふ先決問題を論ずるのは當然なことである。それ故名目主義は、本稿に於て價值單位の貨幣的現象形態と呼んでゐる範圍内に現はれる限りの價值單位を論じてゐる。名目主義では斯くの如き制限を施すので抽象的單位といふ様な非常に複雑な問題を解明することはできない。だから「價值單位の諸現象形態」といふ總體的な現象は一般的にいへば貨幣理論の範圍を越へ、又特殊的に云へば名目主義の範圍を越ゆるものである。本稿はこの事實を明かにしやうとしたものである。又それ以上の事はできてゐない、依つて「貨幣と價值單位の諸現象形態」といふ題目によつて只二三の方面から之が輪廓を書いただけで之を論じ盡してはゐない。(J)